

65【街の散策からの気づき発見】

江東区芭蕉記念館散策

会員 K.T.

江東区芭蕉記念館にきている。この記念館は俳聖芭蕉が深川の地に庵を構え、俳諧活動をしたゆかりの地であることから芭蕉の関係資料を収集・展示して区民の文化的向上を図る目的で、昭和56年(1981)に開館された。門を入ると庭園になっている。記念館入口前に、「草の戸も住み替わる代ぞ雛の家」の句碑がある。入館し、受付で展示拝観料大人200円を払う。

芭蕉が江戸深川六間堀に移り住んだのは延宝八年(1680)のこと。門弟の杉風が持っていた生簀の番小屋を改造した住まいだったという。その翌年、門弟の李下が庭に植えた一株の芭蕉が根つき茂ったところから、この小屋を芭蕉庵と名づけ、俳号も芭蕉とした、という。しかし、芭蕉庵は江戸・明治にかけて滅失し、わからなくなった。たまたま大正6年(1917)津波来襲のあと常盤一丁目で芭蕉が愛好したといわれる石造の蛙が発見されたことから、ここに芭蕉稲荷を祀り、同十年(1921)東京府は常盤一丁目を旧跡に指定した、といわれる。記念館に展示されている「蛙」像が芭蕉庵の跡と指定された証になったらしい。

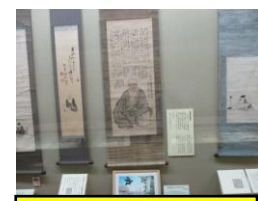
貞享3年(1686)、深川の芭蕉庵で詠まれた「古池や～」の句が有名になり、芭蕉の元に多くの門人やファンから蛙の置物や像が贈られた。芭蕉はそれらを庵に飾って愛好したと伝えられている。芭蕉の愛好した蛙像であるかは、推定の域をでていないようだ。しかし、芭蕉庵の場所の特定は、不明瞭ながら、現常盤一丁目あたりに、深川芭蕉庵があったことは確かであろう。

展示室に、「古池や」の句誕生の説明展示がある。「貞享3年(1686)春、深川芭蕉庵に芭蕉をはじめ門人40人が集まって、「蛙」を題材にした句会(句会)が行われました。そこで芭蕉が詠んだ句が「古池や蛙飛びこむ水のおと」でした。この句が画期的といわれるのは、従来の和歌・連歌の世界で詠まれてきた「蛙の鳴き声」ではなく「飛ぶ蛙とその音」を切り取り、しかもそれまでの俳壇で多かった「面白おかしさ」ではなく、「静かさを強調する音」として詠んだところといわれます。(中略)芭蕉はまず「蛙飛びこむ水のおと」の中下を思い付き、上五を相談したところ、門人の宝井其角が「山吹や」ではどうか、と提案しました。(中略)芭蕉は「山吹といふ五文字ハ、風流にしてはなやかなれど、古池といふ五文字ハ質素にして実也」と言って、「古池や」を採用したとされ、芭蕉の伝統にとらわれない革新性をあらわす逸話といわれます。(後略)」、とある。

「芭蕉略年譜」によると、「天和元年(1681)江戸大火で芭蕉庵は類焼。天和3年(1683)門人たちの寄付で第二次深川芭蕉庵再建、貞享3年(1686)春、この庵で「蛙」の句が生まれた。元禄2年(1689)、芭蕉46歳、深川芭蕉庵を人に譲り、杉風の下屋敷へ移る、同年3月『奥の細道』の旅に旅立つ、同年8月大垣に到着した。その後、京・大津・膳所等、上方を3年ほど転々とし、創作活動を続ける。元禄5年(1692)、芭蕉49歳、江戸に戻り、新築された第三次深川芭蕉庵に入る。元禄7年(1694)初夏(旧暦4月頃)『奥の細道』を完成、同5月、江戸を立ち、同10月大阪にて没。芭蕉51歳、遺言により大津(膳所)の義仲寺に埋葬。」、芭蕉は『奥の細道』の旅から、亡くなるまでの5年間で、「奥の細道」・「ひさご」・「幻住庵記」・「嵯峨日記」・「猿蓑」・「炭俵」・「続猿蓑」の作品を残している。人生の終盤にすばらしい作品を残した。すごい人だと思う。今日でも芭蕉は人気がある。芭蕉の足跡をたどろうと、旅する人は多い。私達の街、春日部にも芭蕉の足跡がある。通称、『曾良の旅日記』に、「元禄2年(1689)3月27日(陽暦では5/16頃)、明方、深川出船、奥羽行脚の途に就く。門人曾良同伴。この日粕壁に泊まる。」、とある。芭蕉の時代を思いながら、『粕壁宿』を歩いてみよう、と思う。



江東区芭蕉記念館



2F 展示



句碑/草の戸も～



2F 展示/発見された蛙の像



芭蕉の旅と旅の句



3F 展示/芭蕉庵イメージ